

株式会社オフィスビル総合研究所
本田広昭

19世紀後半、明治維新により過去の価値観を切り捨てて近代国家を目指したニッポンは、やがて第二次世界大戦に敗れ焦土化し、多くのものを失った。「ニッポンはなくなるかもしれない！ わたしは、なくなる祖国のせめて一部でも写真に残しておきたいとカメラを手にした。」定点撮影の生みの親、写真家の富岡畦草氏（とみおかけいそう）は、写真集「消えた街角」でそう語っている。

我々の先祖は、この幾多の困難局面を価値観の転換で乗り越えて、世界でも有数のすばらしい国家をつくってきた。しかし、「自然に恵まれ、安全で自由、そして物質的に豊かな国」を誇りに思う反面、何か心の中に物足りなさが漂う21世紀のはじまりである。

人生の豊かさについて、哲学者の桑子敏雄氏は「人がどれほど豊かな空間で人生を送ったかということは、その人の人生がどれほど豊かであったということと不可分である」といっている。

豊かさの証を探しに、我々が住む空間に目を転じてみよう。公害も姿を消し、コンクリートで固められた河川の復元など自然環境を取り戻そうとする姿勢が定着して、将来が楽しみである。我々が住む都市ではどうか。電気水道ガスなどのインフラは完璧だが、景観という視点では顔をしかめる人がほとんどである。景観法が生まれたものの、未だに電線と違法看板、放置自転車が街を台無しにしている。

建物空間では家電や内装などの機能性が向上し、便利になったものの、床の間や神棚が姿を消し、住民どうしの交流空間もないため、地域への愛着も希薄である。お手本は、初期の集合住宅といわれる同潤会アパートの中庭文化が必要なのではないだろうか。

我々サラリーマンが人生の多くを過ごすオフィス空間ではどうだろうか？ “せまい、きたない、うるさい、”といわれた、高度経済成長時代のオフィスはほとんど姿を消し、清潔で、オフィス家具の品質も向上した。しかし、なぜかここも愛着の湧く空間とはいえないようだ。

このような物足りなさは、文化が見えない空間のせいではないか。文化としての個人の価値観へのこだわりが反映されていないと感じるのは私だけか。価値観にかかわる能力を「感性」と位置づけた哲学者の桑子敏雄氏は、「感性とは、環境の変動を感知し、それに対応し、また自己のあり方を創造してゆく、価値にかかわる能力である。」と。また「それらの感性は日本の伝統文化に秘められている」とも。21世紀に目指す豊かさは、ここにヒントがありそうだ。